

石神遺跡東方の調査

一第 209・212 次

1 調査の経過

奈良県明日香村に所在する石神遺跡は、明治期に須弥山石・石人像が発見された地として知られており、奈文研は昭和 56 年（1981）以来、発掘調査を重ねてきた。その結果、7 世紀代を中心に、建物、石敷広場、井戸、石組溝などを配した施設を確認し、とくに須弥山石・石人像と石組溝や石敷遺構、新羅土器や東北系黒色土器などの出土から、『日本書紀』にみられる斉明朝の饗宴施設としての性格が指摘されてきた。近年では都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）考古第二研究室が進める再整理によって、出土土器に関する新知見が蓄積されている¹⁾。さらには、石神遺跡一帯は小治田の地に含まれるとみる理解もあり²⁾、推古朝小墾田宮に関連した遺構の検出を期待する機運も高まりつつある。

こうした近年の調査・研究動向を踏まえ、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、2021 年度より石神遺跡とその周辺において継続的に調査をおこなっていくこととした。飛鳥藤原第 209・212 次調査では、石神遺跡東方における土地利用の実態解明を目的とした。

2 遺跡の位置と環境

石神遺跡は飛鳥寺の西北隅に接し、水落遺跡に北接する。前述のように明治期に須弥山石・石人像が発見されて以降、石田茂作（1936 年）や奈良県による調査（1965 年）を経て、奈文研による調査が進められてきた。その結果、遺跡は大規模な建て替えをおこないながら時期とともにその性格を変え、大きく、A 期の斉明朝の饗宴施設、B 期の天武朝の宮外官衙施設、C 期の藤原宮期の建物群という変遷で理解されている（『紀要 2009』）。ただ、前述のように、出土土器に関する新知見から、これまでの石神遺跡像に対して再考を促す検討成果も示されつつある。

石神遺跡 A 期の主要遺構の範囲については、石神第 1・3 次調査で南限施設とみられる東西堀 SA600 を（『藤原概報 12』・『同 14』）、第 13・14 次調査で北限施設の東西堀 SA3893・3895 と石組東西溝 SD3950 を確認している（『紀要 2001』・『同 2002』）。そして第 21 次調査で東限施設の掘立柱建物 SB4341・4340 とそれに取り付く南北堀

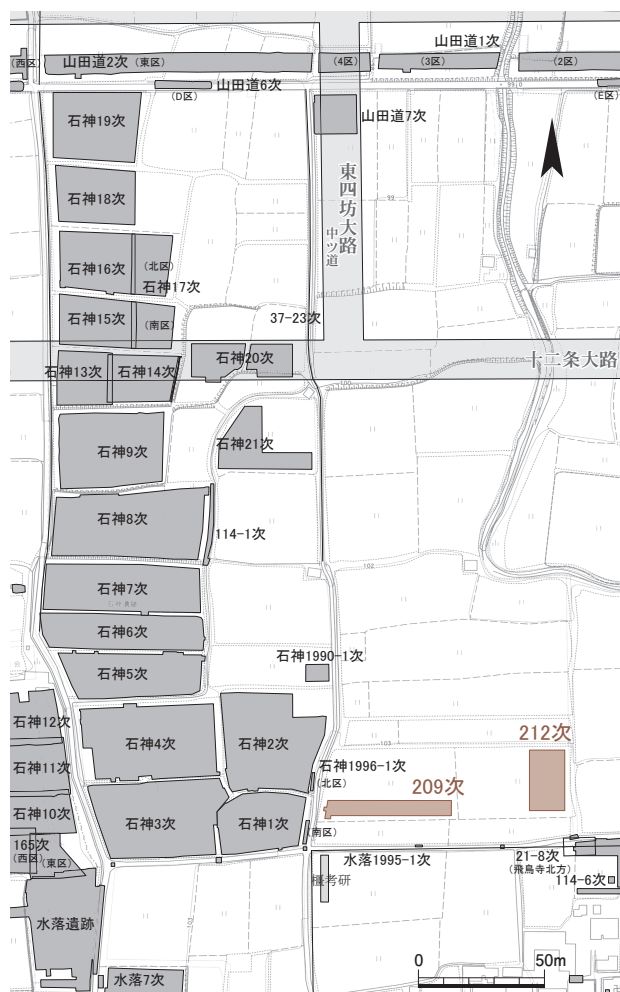


図 28 第 209・212 次調査区位置図 1 : 3000

SA4327・4326 を検出した（『紀要 2009』）。このように遺跡の範囲がおおよそ推定できるようになったいっぽうで、第 1・2 次調査では調査区中央を南北に貫流したのち第 2 次調査区北端で東折し、さらに調査区の東外へ延びる石組東西溝 SD335 を検出している（『藤原概報 13』）。この石組溝の存在は、第 1・2 次調査区より東方にも重要施設が存在する可能性を示唆する。

くわえて、1987 年の明日香村教育委員会による雷丘東方遺跡の調査を契機とし、小墾田宮の所在地を、飛鳥川西岸の古宮土壇一帯ではなく、雷丘東方を含む東岸一帯に想定する見解が主体を占めるようになった。さらには整地土から多量に出土した鉄鏃類を小墾田兵庫と関連付け、飛鳥寺北面に接するこの地一帯を小墾田宮に含ませる考えもある。

なお、飛鳥寺北面大垣では、飛鳥寺北方の調査（飛鳥藤原第 21-8 次）で北外堀 SD501 がとぎれることが確認されており、ここに北面大垣北門が開く可能性が高い（『藤原概報 8』）。飛鳥寺に北接する石神遺跡東方の地は、石神遺跡

と飛鳥寺との関係性を知る上でも重要な場所といえる。

以上から、当該地における建物等の重要施設の展開を含めた土地利用の実態解明を目的とした。

3 第209次調査

調査の概要 調査区は、石神第1次調査区の東に南北6 m、東西50 mを設定した。検出した東西堀の西への展開と東西溝の南北幅の追究を目的として調査区西辺中央および西南隅を拡張し、最終的な調査面積は301㎡である。

作業の経過 調査は2022年1月6日から3月17日にかけて実施した。調査に先立ち、2021年12月20日に調査区の設定とレベル移動、12月27日に調査前の現地の写真撮影をおこなっている。1月6日より環境整備に着手し、同日から1月13日まで重機で表土と耕作土を除去。順次人力に切り替え遺構検出を進めた。2月15日に調査区全景の写真およびSfMによる撮影、16日から遺構実測を進め、21日より断割等による補足調査を実施した。また、調査区西端および西南隅に拡張区を設け調査を進めた。3月3日に東西堀全景および断割調査の細部写真を撮影、実測作業を随時おこない、3月7日より調査終了部分に対する保護用の砂撒きと重機による埋め戻しを開始。3月17日に埋め戻しを完了し、現場の撤収をおこなって発掘作業を終了した。

出土遺物は、取りあげ時に土器、瓦、金属製品等の素材ごとに仕分けて搬入し、調査と併行して洗浄、注記、接合、実測等を実施した。また、本調査では、内部に土が充填した状態の土器が正位置で出土したり、整地土や一部の土坑内より多量の炭、鉄滓が比較的多く出土したため、適宜土ごと持ち帰り、洗浄、選別作業を併行して進め、微細遺物の確認をおこなった。

調査の方法 調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は飛鳥藤原No.31(X=-168,549.309、Y=-16,677.042、H=101.030 m)からオートレベルで直接水準測量をおこなった。

掘削は表土・床土を重機で除去し、以後は人力で掘り下げと遺構検出をおこなったほか、土層観察用に幅1 mの南北畦を2ヵ所設けて調査を進めた。遺構面の記録にあたっては、通常の写真撮影に加えてSfMによる三次元

モデルを作成した。

基本層序 基本層序は、上から①耕作土および床土(厚さ30～40 cm)、②灰褐色土(遺物包含層:厚さ5～15 cm)、④黄褐色砂質土・シルト層(基盤層)となり、②層と④層の間には、部分的に③灰黄褐色や、土器細片や炭粒を多く含む炭褐色などの整地土(厚さ5～15 cm)がみられるほか、調査区南半では東西溝SD4610の堆積層(褐色砂礫層、細砂および粗砂層:厚さ最大1.2 m)が認められた。遺構検出面は③層・④層上面で、標高は101.8～102.0 mである。②層の堆積がみられない地点では、床土直下が遺構検出面となる。

検出遺構 本調査区では、弥生時代後期、古墳時代中・後期、7世紀代の遺構を検出した。主な検出遺構は、東西堀1条、東西溝1条、掘立柱建物1棟、竪穴建物4棟、斜行溝1条、土坑2基などである(図29、PL.13-1)。前述のとおり、遺構は炭褐色土の整地土や黄褐色砂質土、黄褐色シルト層から掘り込まれているが、竪穴建物などは床土直下で検出しており、後世の開墾の影響などにより上層が削平された様子がうかがえた。

後述するように、今回検出した7世紀代の遺構は、既往調査区検出遺構との位置関係および出土土器の検討により、飛鳥浄御原期に属することがあきらかとなっている³⁾。以下では、飛鳥浄御原期とそれ以外の時期の遺構に分けて記述する。

(1) 飛鳥浄御原宮期の遺構

東西堀 SA311 調査区中央を縦断する東西掘立柱堀。柱穴を計24基検出した(PL.13-2・3)。掘方は70～80 cm、深さ45～70 cm(図34)、柱間寸法は約2.1 m。石神第1・3次調査区で検出したSA311の東延長部分にあたり、第3次調査区からの総延長は85 m以上となる。門などの施設は確認されず、調査区の東外へ延びる。多くの柱穴は掘方南端を、後述する東西溝SD4610によって壊される。

東西溝 SD4610 調査区南半で検出した、西流する東西溝(PL.14-1)。南肩は調査区外のため未検出で、溝幅は3.3 m以上となる。溝の断面は、東西堀SA311の柱穴掘方南肩から南へ約1 mで大きく傾斜を変え、溝の下部では断面箱形を呈する(図31～34)。溝上部は土砂が遺構面を大きくえぐっており、その北肩はSA311の柱穴南端を壊すが、本来はSA311から約1 m南に溝北肩が位置していたとみられる。溝底面は、東壁で標高101.30 m、西壁

で101.00 mで、現状の地形同様、西へ向かって傾斜をもつ。埋土は、上層の埋立土（灰黄褐色～褐色砂質土）および砂礫層（灰褐色～暗褐色砂礫土・粗砂）と、下層の水性堆積層（灰褐色～灰黄色細砂・粘砂）に大別される。溝底面の傾斜により、下層の水性堆積層は西壁では10cm前後と薄く、反対に上層の砂礫堆積が目立つ。砂礫層下部には粗砂の堆積も認められ、開口時には一定量の水が継続して流れていたことがわかる。溝の北肩には、溝開口時に形成されたと考えられる灰色砂土が帯状に堆積する。

SD4610は、調査区南半を東西に直線的に延びる経路や、東西塀SA311との位置関係、埋土の状況などから、その下層部分が石神第1・3次調査で検出したSD347の東延長部分と考えられる。くわえて、溝の上層部分は第1次調査区では前述のSD347と同一経路上にあり、第3次調査区と水落遺跡北方の第165次調査区南半を東西に横断する自然流路SD310にあたるとみられ、瓦が集中して出土するほか、径20～30cmの礫の堆積が目立つ。

(2) 古墳時代の遺構

堅穴建物4棟と土坑・斜行溝を検出した。堅穴建物はいずれも造営方位は北で西に振れ、第1次調査区で検出した堅穴建物SB315と軸を同じくする。いずれも上面検出にとどめた。

堅穴建物 SI4612 調査区中央で検出した、北で西に振る堅穴建物（PL.15-1）。規模は東西4.0m、南北2.9m、深さ31cmほどが遺存する。南半は、東西溝SD4610、東西塀SA311、東壁と北壁中央は土坑SK4618、SK4621により壊される。また、東北隅は土坑SK4619と重複する（図32）。西南部壁寄りに、約50cm四方の範囲で炭の堆積がみられ、東南部壁隅からも長さ25～30cm前後の硬化面を2ヵ所検出した。

堅穴建物 SI4613 調査区中央で検出した、北で西に振る堅穴建物（PL.15-1）。東西3.8m、南北3.7mの規模で、中央東壁寄りで10～30cmの礫の集中がみられた。この礫の周囲からは焼土片と炭粒を多く検出している。東南隅からは、正置状態で土師器甕（図39-5）が出土した。西南端は東西塀SA311により壊される。

堅穴建物 SI4614 調査区中央北半で検出した堅穴建物。北で西に振る。東西2.5m、調査区北外に延びるため南北規模は不明。東壁および南半は、東西塀SA311掘込面の整地土が覆うことから、部分的な検出にとどめた。

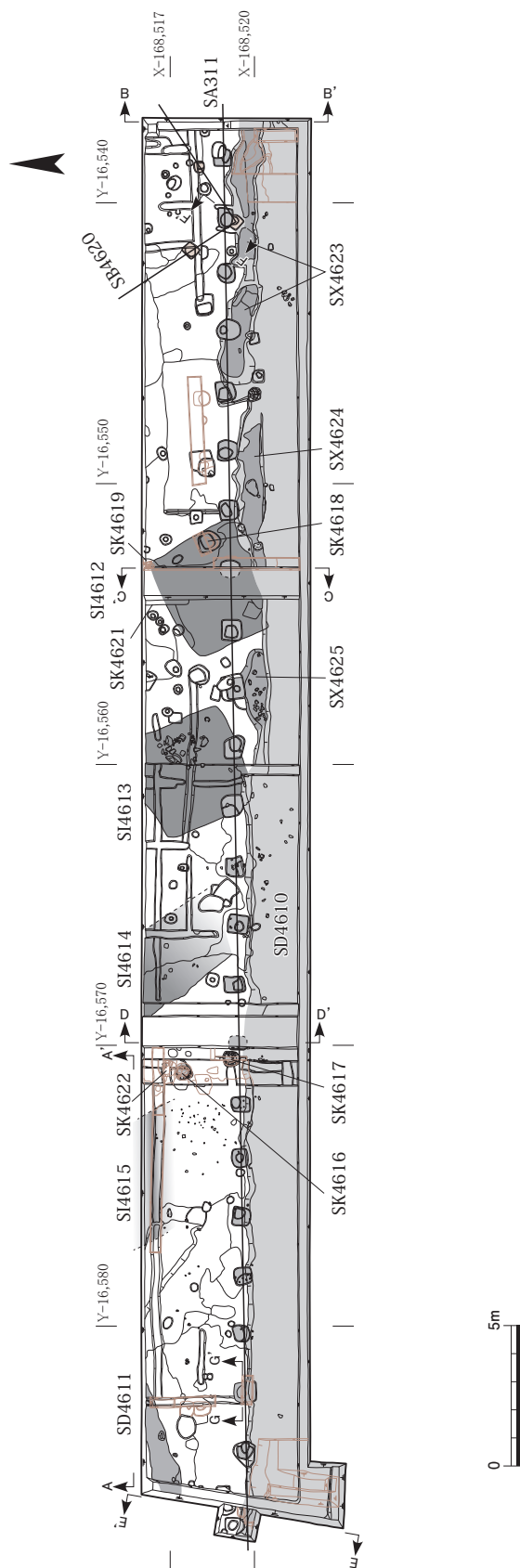


図29 第209次調査区遺構図 1:250

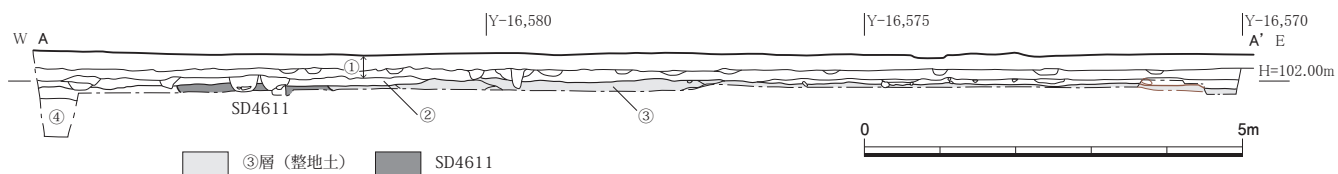


図 30 第 209 次調査区西半北壁土層図 1 : 100

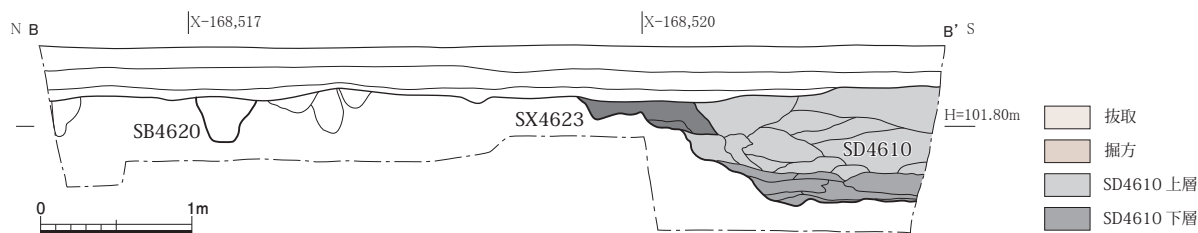


図 31 第 209 次調査区東壁土層図 1 : 50

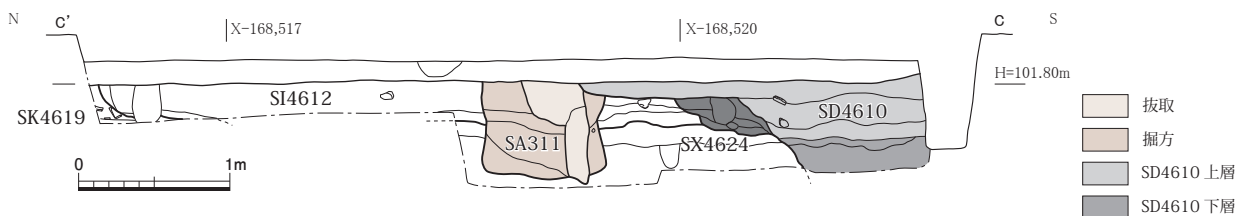


図 32 第 209 次調査区東半畦東壁土層図 (南北反転) 1 : 50

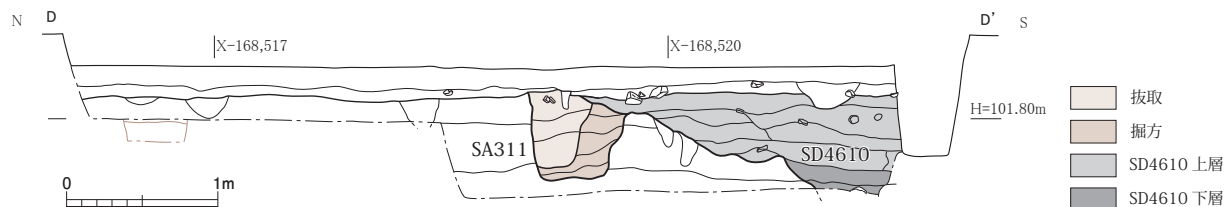


図 33 第 209 次調査区西半畦西壁土層図 1 : 50

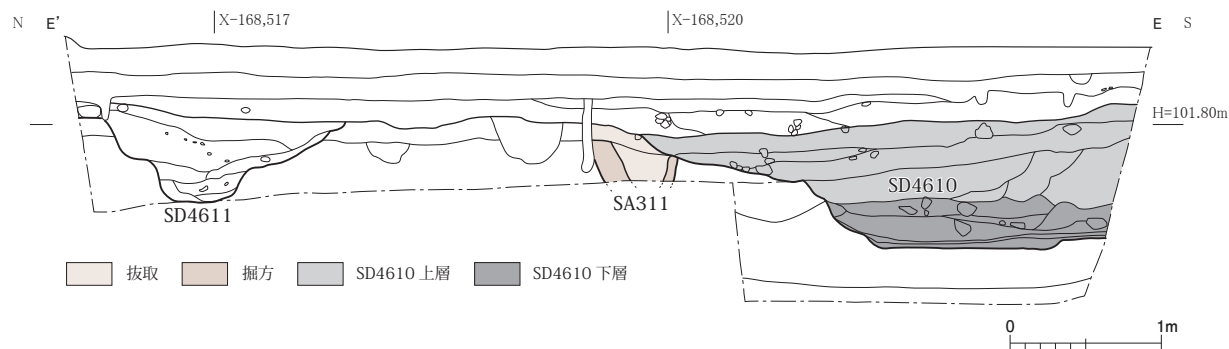


図 34 第 209 次調査区西壁土層図 (南北反転) 1 : 50

竪穴建物 SI4615 調査区西寄りの北端で検出した竪穴建物。東西規模は 4.5 m。整地土下で部分的に検出した。

土坑 SK4618 調査区東部で検出した土坑 (図 36, PL.15-3)。直径 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.5 m。前述した竪穴

建物 SI4612 を壊す。断面で掘方と抜取を認識し、柱穴の可能性を考えたが、本遺構と組む柱穴は確認できなかった。埋土から、ほぼ完形の布留型甕 (図 39-6) が口縁部を斜めにして出土した。

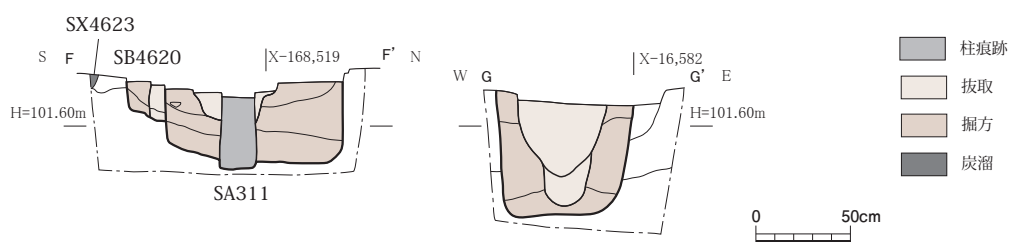


図 35 東西塀 SA311 柱穴断面図 1 : 40

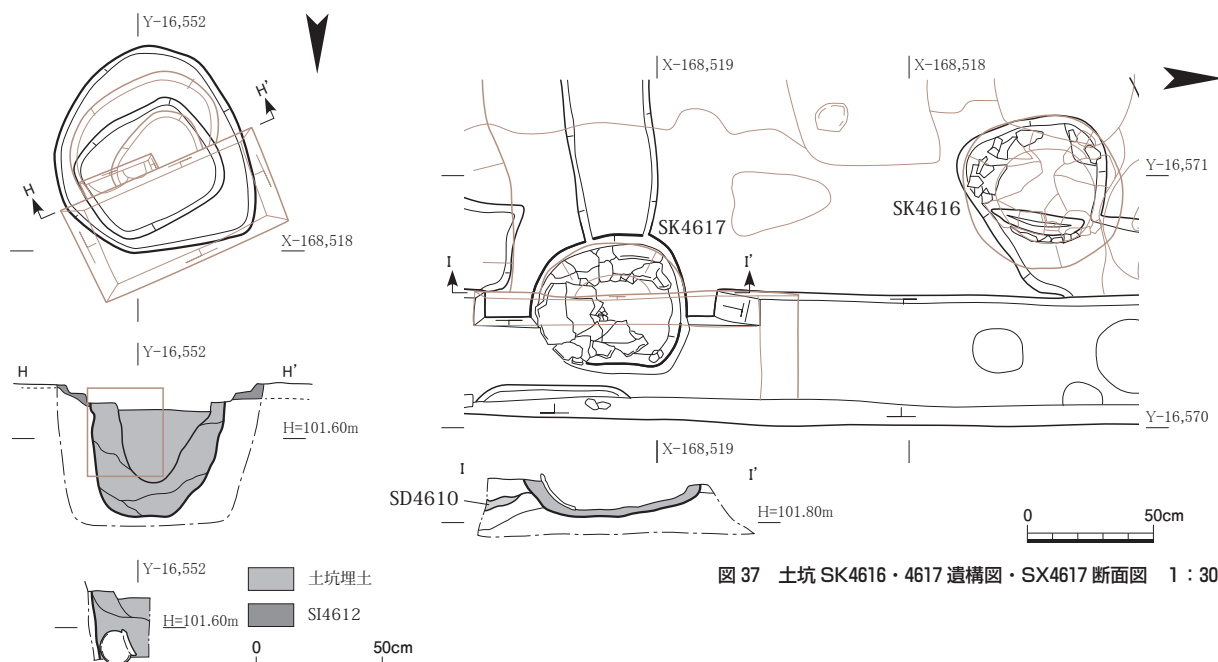


図 36 土坑 SK4618 遺構図・断面図 1 : 30

斜行溝 SD4611 調査区西端で検出した溝で、調査区西北端を南西－北東方向に延びる (PL.15-2)。幅 1.7m、調査区西壁で深さ 0.65 m を測り (図 34)、埋土上層からは土師器直口壺 (図 39-7) や甕胴部片が出土した。

(3) その他の時代の遺構

掘立柱建物 SB4620 調査区東端で検出した東西棟建物。3 基の柱穴を検出し、うち 1 基は調査区東壁にかかる (図 31)。柱穴は直径 0.35 ～ 0.5 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m。造営方位の軸は東で北に振れる。西南隅の 1 基は東西塀 SA311 の柱穴と重複し、これより古い。

土坑 SK4619 調査区東半の南北畦沿いで検出した土坑。長辺 0.8 m 以上の楕円形土坑とみられる。竪穴建物 SI4612 と重複し、これより古い。黒褐色の埋土から弥生時代後期の甕 (図 39-1・2) と高杯脚部 (図 39-3) が出土した。

土坑 SK4616 調査区西半の南北畦沿いで検出した土坑 (図 37, PL.15-4)。直径 0.6 m、深さ約 0.2 m。内部より土器 (図 39-4) が正置状態で出土したが、上部は失われ

ていた。

土坑 SK4617 SK4616 から約 1.5 m 南東の南北畦西側で検出した土坑 (図 37, PL.15-4・5)。SK4616 同様、内部より土器が正置状態で出土した。直径 0.5 ～ 0.6 m、深さ約 0.2 m。掘方は土器とほぼ同規模で、東西溝 SD4610 上層埋土を一部壊す。土器は胴部のみが遺存し、底部および口縁部ともに欠失するが、胴部形態、調整や胎土の点から、SK4616 出土品と同様の形態であったとみられる。ともに性格不明であるが、両者の位置関係やその出土状況から、一連の遺構である可能性が高い。

土坑 SK4621 調査区東半の南北畦の西壁に接して検出した土坑。南北 1.5 m、東西約 0.2 m の範囲で検出し、竪穴建物 SI4612 を壊す。黒褐色の埋土内部からは土師器杯蓋や丸瓦細片が出土した。

土坑 SK4622 調査区中央、西寄り検出した平面楕円形の土坑 (PL.14-5)。直径 0.5 ～ 0.7 m、深さ約 0.2 m。SA311 掘込面である③層を掘り込む。暗褐色砂質土の埋土からは、土師器片や平瓦のほか、轆羽口片、鉄滓、

表7 第209次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
素弁	1		橘唐草（近現代）	1		へら書き平瓦	2
複弁	1					磚	1
？	1					瓦製円盤・小玉	3
軒丸瓦計			3	軒平瓦計	1	その他計	6
丸瓦			平瓦			様原石	
重量	14.77kg		43.50kg			0.25kg	
点数	133		687			1	

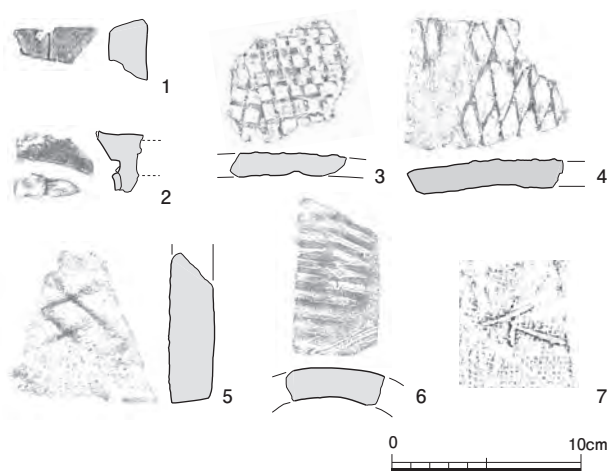


図38 第209次調査出土瓦 1：4（1～6）、1：2（7）

多量の炭粒片が出土した。鉄器小片や鍛造剥片も出土しており、鍛冶にともなう廃棄土坑とみられる。

炭溜 SX4623 ～ 4625 調査区中央から東の南半で検出した炭溜。東西溝SD4610北肩に張り付くように堆積する。周囲からは轡羽口や鉄滓の出土が目立つ。

（松永悦枝／文化庁）

（4）出土遺物

瓦磚類 出土瓦磚類は表7のとおりである。東西溝SD4610上層からの出土が全体の5割弱であり、これに続く遺物包含層の灰褐色土が全体の2割を占める。それ以外は、概ね床土や耕作溝から出土した。

軒丸瓦3点は、いずれも細片で型式は特定できない。ここでは、文様の情報がある程度得られた2点を報告する（図38-1・2）。1は素弁蓮華文。弁は割り付けから10弁以上とみられ、蓮弁・間弁ともに平板である。飛鳥寺創建期の所産。東西溝SD4610上層出土。2は複弁蓮華文。飛鳥寺XIV型式に似るが、弁端の立ち上がりが低い。丸瓦部先端は未加工とみられる。7世紀後半の所産であろう。耕作溝出土。

丸・平瓦は、大半が赤褐色ないし褐色で白色の砂粒を

含み、軟質である。ナデ調整により仕上げるものが多いが、タタキ痕が残る個体も一定数ある。図38の3～5は平瓦、6は丸瓦。3は格子タタキ、4は瓦の長軸方向に対し長い斜格子タタキ、5は短い斜格子タタキ、6は平行タタキ。格子タタキのちハケ目調整する個体や、縄タタキ痕をもつ個体もある。このほか、模骨が玉縁部に達しない丸瓦（A手法）や、凹面にへら書き（□〔大カ〕^{4）}のある平瓦（図38-7、PL16-3）が出土した。

飛鳥寺およびその周辺から上記と類似する瓦が出土していることや、本調査区が飛鳥寺北限に近接していること、SD4610上層から出土した割合が高いことなどから、本調査出土瓦には飛鳥寺から流入した瓦が多く含まれているとみられる。

（岩永 玲・田中龍一）

土器 整理用木箱19箱分が出土した。縄文土器の小片、弥生時代前期から古墳時代初頭の土器、古墳時代中・後期の土師器・須恵器、飛鳥時代から平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などである（PL16-1）。

SD4611・SI4613・SK4616・4618・4619 出土土器

図39-1～3は土坑SK4619出土。1・2は弥生後期型（第V様式系）甕。底部は欠損する。分割成形で外面はタタキ、内面はヨコハケおよび左上がりのハケ目により調整する。口縁部は「く」字形に屈曲する。3は高杯脚部。脚裾部上部の三方に円形の透孔をもつ。外面を縦方向のへらミガキ、内面を一定方向のハケ目で調整する。庄内式期前半に類例がみえる。4は土坑SK4616から出土した平底の粗製大型壺。口頸部は欠損する。胴部上半が強く張る。外面には、横方向および縦方向の板ナデあるいはハケ目による調整が施される。内面は摩耗が激しい。5は堅穴建物SI4613から出土した布留型甕。上半部のみが残る。口縁端部はわずかに肥厚し内傾する。口縁部から頸部内外面はヨコナデ、胴部外面には横方向および左上がりのハケ目調整を施し、内面は粘土紐積み上げ痕と指頭痕が顕著にみられる。布留4式期頃か。6は土坑SK4618から出土したほぼ完形の布留型甕。やや幅広の球形を呈す。口縁部は内彎気味に開き、端部は内傾し面をもつ。口縁部から頸部内外面はヨコナデ、胴部外面をヨコハケとタテハケで調整し、胴部内面には左上がりのナデを施し、底面には押圧痕を残す。布留4式期頃。7は斜行溝SD4611から出土したほぼ完形の直口壺。口頸部下半の内側が顕著に肥厚し、肩部が強く張る。古墳時代

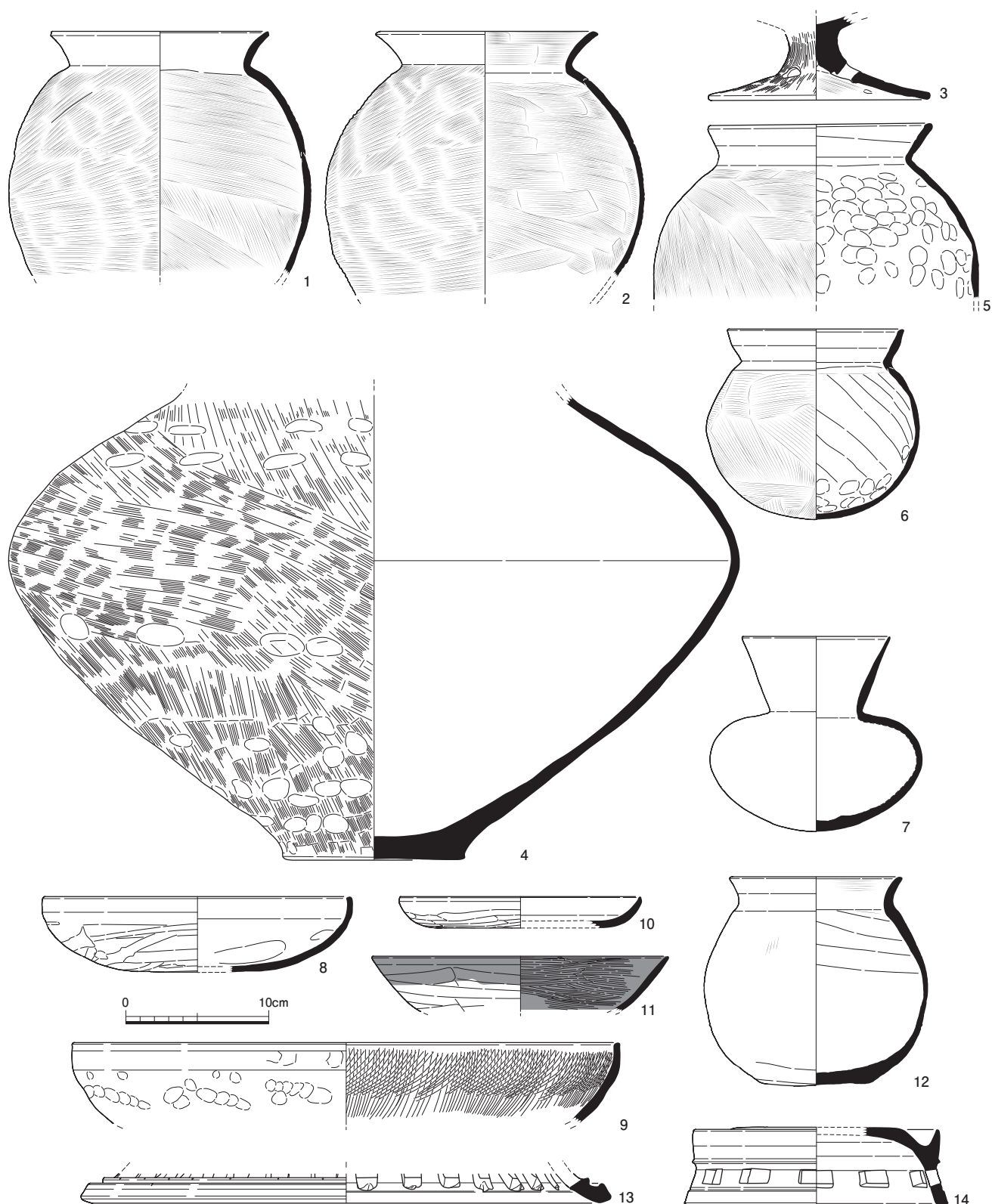


図 39 第 209 次調査遺構出土土器 1 : 4

中期頃に比定できる。

東西溝 SD4610 出土土器 整理用木箱 2 箱分が出土したが、そのほとんどが小片であった。

埋土下層（灰黒色砂）および北肩の堆積土（灰色砂土）からは、7 世紀後半から藤原宮期に位置づけられる土器

が出土した。土師器は、杯 C、甕、須恵器は、杯 A、杯 H、かえりをもつ杯蓋、壺、甕などを含む。図 39-8 は灰黒色砂から出土した。杯 C に分類したが、内面に放射暗文はみられず、円形暗文のみが部分的に施される。底部外面はやや不規則な横方向のヘラケズリと部分的なへ

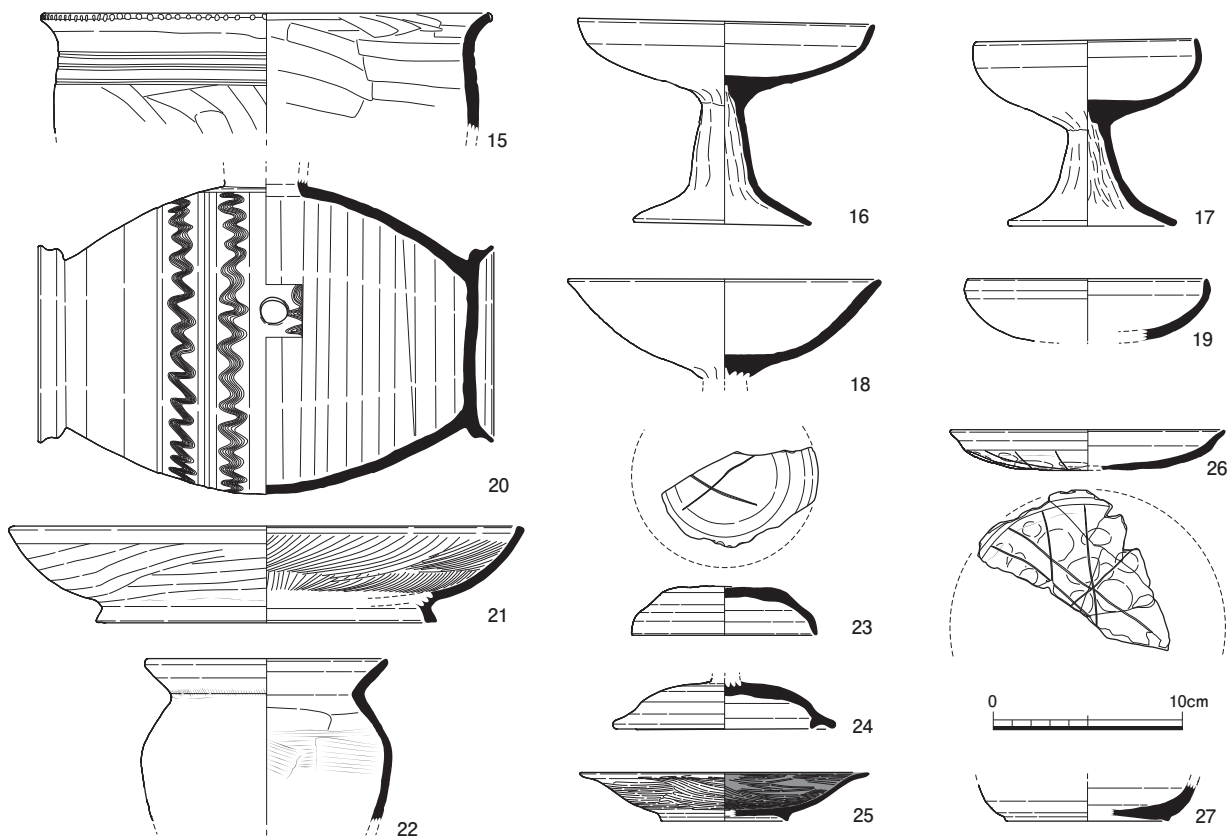


図40 第209次調査遺物包含層出土土器 1:4

ラミガキで仕上げる。復元口径218mm。口縁部残存率8.3%。径高指数24.3。9は灰色砂土から出土した大型鉢。内面には二段放射暗文、外面上半には横ナデが施され、下半には指頭痕が残る。口縁部残存率10.6%。

埋土上層（灰褐色砂）は、藤原宮期から平安時代前期頃の土器が主体を占める。土師器は、杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、碗、皿、高杯、甕、須恵器は、杯A、杯B、かえりをもたない杯蓋、杯G蓋、杯H、杯H蓋、皿B、壺、平瓶、甕、圈足円面硯など、また、黒色土器A類の碗が含まれる。10は小型の土師器皿。底部外面に横方向のヘラケズリを施す。9世紀頃の所産か。復元口径170mm。口縁部残存率7.5%。11は黒色土器A類の碗。内面は横方向のヘラミガキで仕上げ、外面には横方向のヘラケズリを施す。9世紀後半頃の畿内系I類に比定できるか⁵⁾。復元口径210mm。口縁部残存率8.1%。12は平底の小型甕。器面の摩耗が激しいが、口縁部および胴部外面はハケ目による調整、胴部内面は左上がりのヘラナデにより調整されたようである。13・14は圈足円面硯。13はおそらく大型の圈足円面硯aで、縦長長方形の透孔の一部をとともう脚裾部のみが残る。脚裾部外端残存率15%。14は中型の圈足円面硯bで、脚部に横長長方形の透孔が11ヵ所あったと思われる。脚裾部外端残存率9.2%。

②層（遺物包含層）出土土器 整理用木箱4箱分の土器が出土した（図40）。

弥生時代の土器は、甕、加飾壺、長頸壺、直口壺、二重口縁壺、鉢、有孔鉢、高杯などのほか、貼付突帯文をもつ土器もみられる。いずれも小片である。15は弥生時代前期の甕。如意形口縁を呈し、口縁端部に刻目文、胴部上位外面には篋描沈線による直線文が3条施される。内外ともにヘラナデ調整。

古墳時代の土器は、土師器が甕（布留型）、高杯、杯、製塩土器など、須恵器が杯H、杯H蓋、甕、甕などからなる。16～18は古墳時代中・後期の土師器高杯。円板充填法による製作とみられ、脚部内面には棒状の刺突痕が残る。16・17は口縁部が内彎する。いずれも口縁部を横方向のナデにより調整し、脚柱部外面には縦方向のヘラナデを施す。脚柱部内面には絞り痕が残る。18は外反口縁をもち、器面は摩耗が目立つ。19は古墳時代中・後期の土師器杯。口縁部は内彎し、口縁部外面には1条の沈線をめぐらす。全体を横方向のナデで調整し、口縁部が大きく歪む。20は須恵器の樽形甕。体部の約半分が遺存し、復元的に図示した。口頸部は完全に欠損する。体部は中央が膨らみ、中央やや上寄りに直径14mmほどの円孔が穿たれる。胴部外面にはクロコナデ後に、円孔を中

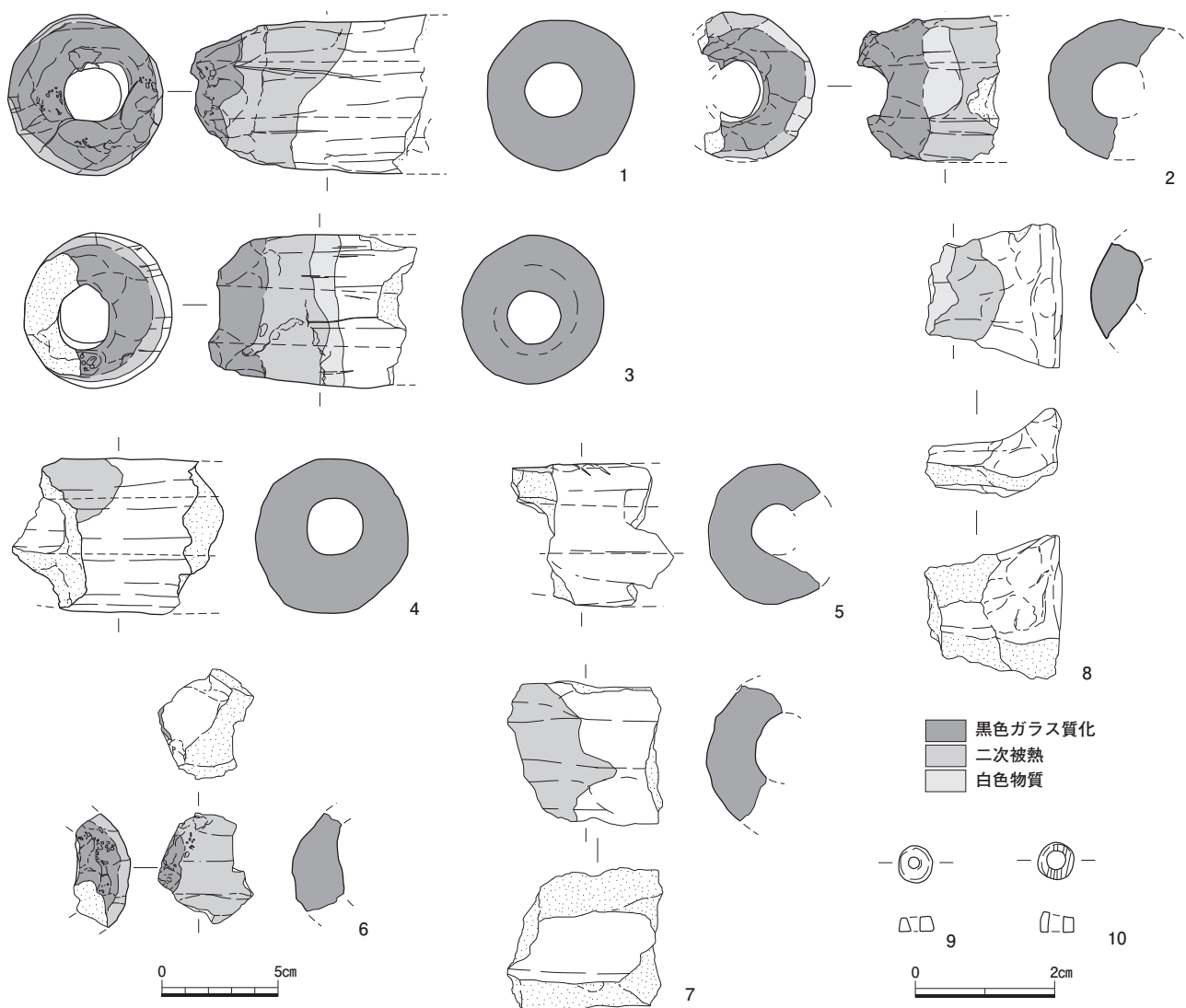


図 41 第 209 次調査出土土金関連遺物および玉類 1 : 3 (羽口)、1 : 1 (白玉)

心に縦方向の櫛描波状文が左右に 2 条ずつ施される。体部内面には強めのロクロナデ痕が残る、側面には体部成形時のナデツケ痕跡やわずかな指頭痕が残る。形態的特徴から、TK208 型式期を下限とする 5 世紀中葉頃に比定される。

飛鳥時代から奈良時代の土器は、土師器が杯 A、杯 B、杯蓋、杯 C、杯 H、杯 G、碗、皿 A、皿 C、鉢、高杯、壺 A、甕、土釜、甌、甕、須恵器が杯 A、杯 B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、杯 H、杯 H 蓋、杯 G 蓋、杯 J、碗、皿 A、低脚高杯、壺 A 蓋、壺 B、壺 K、平瓶、甕 A などからなる。21 ~ 23 は土師器。21 は皿 B。口縁部はわずかに内彎しながら、外上方にひらく。内面に二段放射暗文を施し、外面は横方向のヘラケズリで調整する。復元口径 273mm。口縁部残存率 8.3%。藤原宮期(飛鳥 V) 以降とみるべきであろう。22 は小型の甕。器面摩耗が激しいが、口縁部はヨコナデ調整し、胴部内面には

ヨコハケ、胴部外面にはタテハケを施す。口縁部は完存する。23・24 は須恵器。23 は杯 H 蓋。頂部外面はヘラ切り不調整。頂部に×印のヘラ書きがみられる。復元口径が 98mm であり、飛鳥 II とみなせる⁶⁾。24 はかえりをもつ杯蓋。かえりは外端部よりも下にやや張り出す。頂部にやや粗いロクロケズリを施す。外端径が 118mm であり、飛鳥 III・IV に分類できる⁷⁾。

平安時代の土器は、土師器が杯、碗、皿、甕、土釜、須恵器が杯、碗、皿、壺、甕などの他に、黒色土器 A 類の碗と緑釉陶器も含まれる。25 は黒色土器 A 類の皿。浅手の外形を呈する。内外面ともに横方向のヘラミガキで調整する。底部には高台が張り付けられ、底部外面は不調整。9 世紀前半頃の畿内系 II 類に分類できる⁸⁾。口縁部残存率 21.9%。26 は皿 A。つくりが粗く、内面は無暗文。底部外面をユビオサエで調整し、複数の直線からなるヘラ書きを残す。復元口径 146mm。口縁部残存率 7.8%。9

表8 第209次調査出土鉄滓集計表

遺構名	重量 (g)	備考
東西溝SD4610	2287.15	粒状滓出土
柱穴SA311	560.90	7基のうち5基は抜出土
③層 (整地土)	322.89	大部分が炭褐色整地土出土
②層 (遺物包含層)	1950.19	
耕作溝	408.02	流動滓、粒状滓出土
床土・その他	331.34	流動滓、粒状滓出土

世紀後半頃の所産。27は緑釉陶器底部。施釉は外面にのみみられることから、壺の底部と思われる。削り出しによる円盤状高台をもつ。底部外面には糸切り痕が残る。

(山藤正敏)

鉄製品 東西堀 SA311 柱穴、東西溝 SD4610 や②層などから、鉄鏃、刀子、鉄釘などが標本箱2箱分出土したが、小片が多く、全体形がわかるものは僅少である。

冶金関連遺物 轆羽口のほかに、整地土や土坑、東西溝 SD4610 から鉄滓や鍛冶作業時に生じる鍛造剥片、球状滓が出土したほか、わずかに壁土もみられた (PL16-4)。轆羽口は総重量 3564.8g が出土し、とくに、東西溝 SD4610、調査区西の北半に広がる③層や土坑 SK4622 に集中する。破片が多く、先端部から後端部まで遺存するものはない。このうち、全体形がわかるものを中心に8点を図化した (図41)。先端部が遺存するものは、被熱による溶解、発泡がみられ (1~3・6)、暗灰色や暗青灰色にガラス質化する。形状は、平面円筒形で先端部は面をもってすばまり、肉厚のもの (1~7)、全長が短く、裾が「ハ」字状に広がるもの (8) に二分される。破片資料についても、前者の形態が主体を占めるとみられる。孔は中心からやや偏る位置のものが目立つ (1・3~5)。外面は縦方向のヘラナデにより多数の面をもつほか、スマキ痕⁹⁾とされる、縦方向の線状痕や押圧痕が観察される個体 (1・3・4) もある。1は、先端部側に帯状の粘土板接合痕や線状痕を多く残す。7は、外面に数条の縦ナデが明瞭に残り、断面は多角形に近い。8は、送風管取り付けにともなう削り出しは不明瞭であるが、裾部が広がりソケット状を呈する。1~7は全長10cm強、孔径2.4cm前後、器壁の厚さ1.6~2.5cm、8は全長6cm強、孔径6.1cm、器壁の厚さは1.8cm。1は土坑 SK4622、2・3は床土および②層、4・7は耕作溝、5・8は東西溝 SD4610 北肩の堆積土、6は東西堀 SA311 出土。

円筒形の1~7は飛鳥時代以降に盛行するもので、石神遺跡の既往の調査のほか、近隣の水落遺跡、そして飛鳥池遺跡や川原寺寺域北限でも出土している。8の全長が短いソケット状の形態は、古墳時代中期に盛行する羽口の形態と共通する¹⁰⁾。

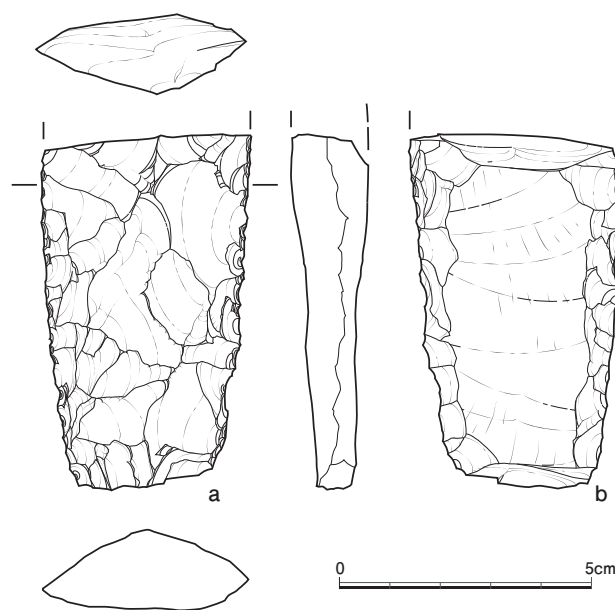


図42 第209次調査出土石器 2:3

鉄滓は総重量 6049.7 g が出土した。轆羽口同様、東西溝 SD4610 からの出土が目立つほか、調査区西北半の③層や同区の②層からも多く出土し、とくに 200g 以上の椀形滓の出土が集中する傾向にある。その一覧は表2のとおりである。椀形滓のほか、流動滓や粒状滓、銅滓も散見されることから、近隣における一連の鍛冶行為、あるいは工房の存在を示唆する。

玉 類 滑石製白玉が2点出土した (図41-9・10)。側面はややふくらみ、擦痕が明瞭に残る。9は直径4.9mm、孔径1~2mm、厚さ2mm、10は直径5mm、孔径2~25mm、厚さ2~3mm。調査区中央の②層出土。 (松永)

石 器 両面調整石器が1点出土している (図42、PL16-5)。先端側とみられる一端を折損するが、その断面が片凸レンズ形を呈する木葉形尖頭器とみられる。凸面 (a面) 側は侵形の調整剥離痕で覆われるものの、その裏面 (b面) には素材剥片の主要剥離面が広く残る。b面側の調整剥離は素材の周縁を縁どる程度で奥まで延びず、多くがa面側の調整剥離によって切りとられている。図の下端にある折れ面は、a面側にある一部の調整剥離痕より古い。上端の折れ面は周囲の調整剥離痕より新しい。石材はサヌカイトで、風化が進んでいるために石理の縞模様が明瞭に見える。遊離資料であるが、転磨した痕跡は認められない。縄文時代草創期のものか。出土地点不明。 (森川 実)

その他 これ以外に、床土や②層、耕作溝より、サヌカイトの石鏃、石匙、削器、剥片等が小コンテナ1箱分、②層より馬歯1点が出土した。 (松永)

4 第212次調査

調査の概要 第212次調査では、第209次調査で検出した東西塀 SA311 の東への展開を視野に入れつつ、その北側の様相を追究することを目的に、第209次調査のある水田の東端に調査区を設定した。調査区は第209次調査区から約30 m東に位置し、大きさは南北24 m、東西14 mで調査面積は336㎡である。

作業の経過 調査は2022年12月12日から2023年3月17日にかけて実施した。調査に先立ち、2022年11月29日に現地の調査前の写真撮影、12月6日に調査区の設定とレベル移動をおこなった。12月12日より環境整備に着手し、同日から16日まで重機で表土と耕作土を除去。16日より南側から人力での掘削をおこなって遺構検出を進めた。3月1日に全景写真およびSfMによる三次元モデル作成のための写真撮影。2日から遺構実測を進め、7日から断割などによる補足調査を実施し、随時実測をおこなった。10日に断割調査の細部写真を撮影。13日から砂撒き、14日から重機による埋戻しを開始。15日に撤収作業をおこない、16日に埋戻し完了。17日に現状復旧を終え、調査を終了した。

出土遺物は、取りあげ時に土器、瓦、金属製品等の素材ごとに仕分けて搬入し、調査と併行して洗浄、注記、接合、実測等を実施した。

調査の方法 調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は、飛鳥藤原 No.31 (X = -168,549.309、Y = -16,677.042、H = 101.030 m) からオートレベルで直接水準測量をおこなった。

掘削は表土と耕作土を重機で除去し、以後は人力で掘り下げと遺構検出をおこなった。また、遺構面の記録にあたっては、通常の写真撮影に加えてSfMによる三次元モデル作成のための写真撮影を実施した。

基本層序 調査区の基本層序は、上から順に①耕作土・床土(約30～40cm)、②灰色砂質土(遺物包含層:約5cm)、③暗黄灰色砂質土・褐色砂質土(整地土:約20cm。黒褐色土・褐色土として取りあげ)、④黄褐色シルト・褐色シルト(基盤層)である。⑤層と⑥層は調査区の北半のみで見られ、南半では床土直下が⑦層となる。⑧層が第209次調査区の①層、⑨層が②層、⑩層が④層に対応し、⑪層

は第209次調査区ではみられない。また、調査区南壁中央付近では床土と黄褐色シルトの間に、後述する南北溝SD4635Aを覆って東西方向に延びる粗砂層がみられた(図46)。この粗砂層は、その位置からみて、石神第1・3次調査区で確認されている自然流路SD310の東延長部分の一部にあたる可能性がある。

遺構検出は、①層・②層を除去しておこなったが、③層上面では、後述する南北溝SD4630B・4635Bのほかには顕著な遺構がみられなかった。そのため、③層を除去し④層上面で再度遺構検出をおこなった。遺構検出面の標高は101.7～102.0 mで北に向かって低くなっており、③層の整地による嵩上げで平坦地が造成されたものとみられる。また、調査区南半では床土直下で弥生・古墳時代の遺構を検出しており、後世の開墾などにより大きく削平を受けている可能性も考えられる。

検出遺構 7世紀代の遺構として石組遺構1基、南北溝2条、土坑1基を検出したほか、弥生・古墳時代の土坑や竪穴建物などを検出している(図43、PL.17)。以下、7世紀代の遺構とそれ以外に分けて詳述する。

(1) 7世紀代の遺構

南北溝 SD4635A 調査区中央よりやや西を縦断する南北方向の素掘溝で、石組遺構SX4630を壊す。調査区北半の③層を除去して検出した。北で西に約5°振れており、調査区の南北へ延びる。幅1.7～2.0 m、深さ0.5 m前後で、断面は逆台形を呈し、黒褐色粘質土で埋められる(図44～46、PL.18-2)。本遺構出土土器は飛鳥Ⅰ～Ⅱに位置づけられる(図52-9～17)。

この溝に重複して直上に砂利層と褐色砂質土が溝状に堆積するが、これらは③層よりも新しいことから、SD4635Aとは形成・埋没時期が異なると判断し、後述する南北溝SD4635Bとした。

南北溝 SD4630A 調査区中央よりやや東を縦断する南北方向の素掘溝(PL.18-3)。溝の方向はほぼ正方位で、北へ向かって幅と深さを増しながら調査区北外へと続く(図44・45)。調査区南壁では対応する位置で粗砂層が深く落ち込んでおり、明瞭な掘方を確認できなかった(図46)。幅0.5～1.2 m、深さ0.3～0.5 m。埋土は黒褐色粘質土で、最下部は鉄分の沈着が目立つ。飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられる須恵器(図52-18～28)が出土した。

調査区南半では東肩を後述する南北溝SD4639に壊さ

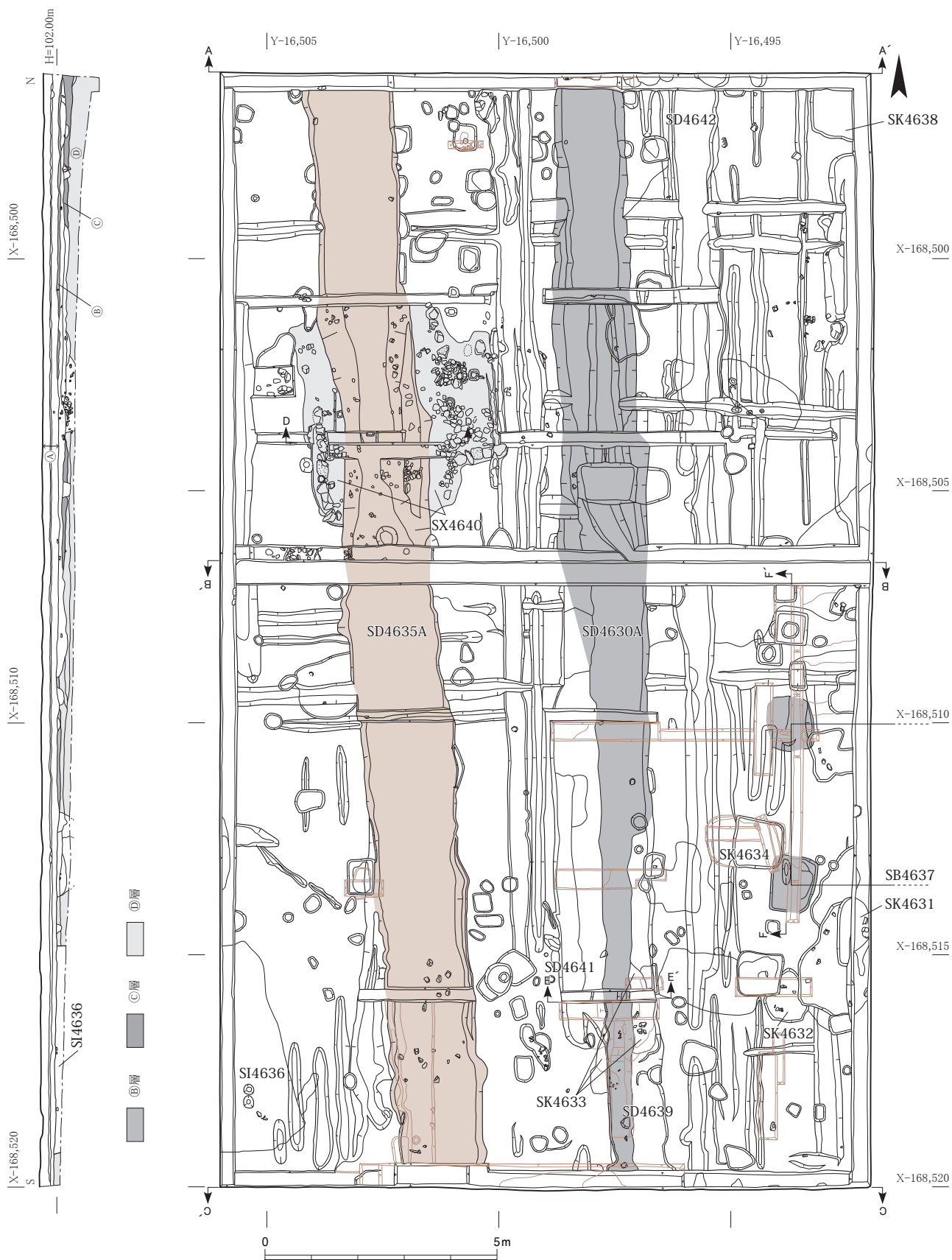


图 43 第 212 次調査区遺構図・西壁土層図 1 : 120

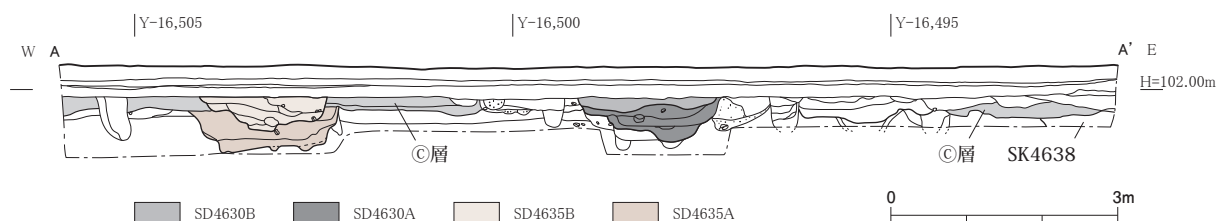


図 44 第 212 次調査区北壁土層図 1 : 100

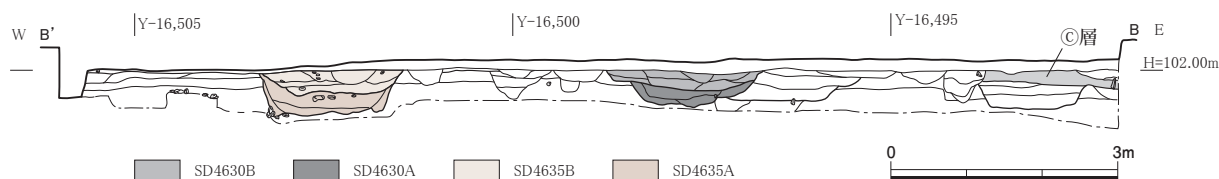


図 45 第 212 次調査区中央断割土層図（東西反転） 1 : 100

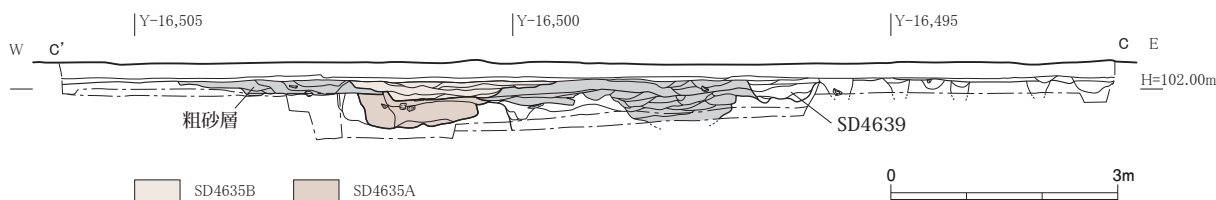


図 46 第 212 次調査区南壁土層図（東西反転） 1 : 100

れる。北半では直上に褐色砂質土が堆積するが、後述する南北溝 SD4639 の埋土との区別が困難であったことから、SD4630A とは時期が異なる堆積と判断し、後述する南北溝 SD4630B とした。

石組遺構 SX4640 調査区西北部で検出した石組遺構(図 43・47、PL.19-4・5)。今回の調査では上面検出と断割調査にとどめた。南北溝 SD4635A に壊されるが、平面形は東に張り出す凸字形に復元できる。掘方は石組の 10～20cm ほど外側で検出でき、遺構の向きは、西辺南半で測ると、北で西に約 5° 振れる。張り出し部を除いた長方形部分の大きさは、石組の内法で東西 2.5 m、南北 4.0 m。西辺南半では 20～30cm の石が南北に並ぶ状況がよく残り、東辺では北半で石の並びを比較的良好に確認できるが、張り出しとの接続部付近では 10～20cm の石が散乱した状態であった。南辺および北辺は SD4635A に壊されており、石組は確認できていない。張り出し部は東西方向に延びる石列が 1 m ほど残り、石組内法で南北 2 m である。

断割調査により、西辺は石が 2 段に積まれ、底面には 10cm ほどの礫が敷かれていたことを確認した (PL.19-5)。ただし、礫敷の大部分は SD4635A に壊されて残っていない。遺構検出面から礫敷上面までの深さは 0.45 m で、

オリブ褐色砂質土で埋められている。

遺構の性格や詳細な構築方法の解明は今後の課題であるが、底面に礫が敷かれた石組遺構であることから、石組池のような機能を想定することもできる。ただし、今回の断割調査では湛水を示すような堆積は確認できなかった。

土坑 SK4638 調査区東北隅で検出した土坑。北と東は調査区外へと続いており、東西 1 m、南北 1 m ほどが調査区にかかる。深さ 0.2 m 以上で、土師器高杯 (図 52-29) が出土した。

(2) 弥生・古墳時代の遺構

竪穴建物 SI4636 調査区西南隅で検出した竪穴建物 (PL.19-6)。規模は南北 4.5 m で、東西幅は、南辺付近で 1.8 m を検出したが、さらに調査区の西外へ続く。建物の方位は北で西に 15° 振っており、第 209 次調査区で検出した竪穴建物とほぼ同じである。埋土は黒褐色で、調査区の西排水溝にかかる部分から古墳時代の土師器高杯・小型丸底土器 (図 51-5～8) が出土した。

土坑 SK4631 調査区南部の東壁沿いで検出した土坑 (PL.19-7)。排水溝で一部を確認したのみで、規模は不明。埋土は黒褐色で、弥生時代の甕蓋 (図 51-1) が出土した。

土坑 SK4632 調査区東南部で検出した土坑。直径 0.9

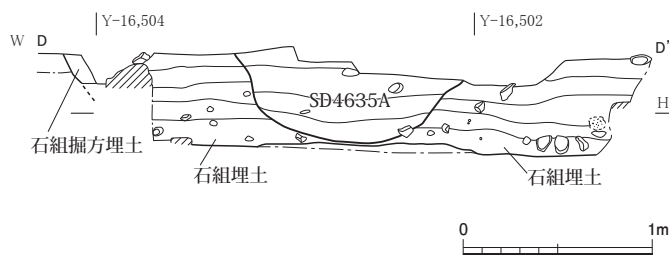


図 47 石組遺構 SX4640 断面図 1 : 40

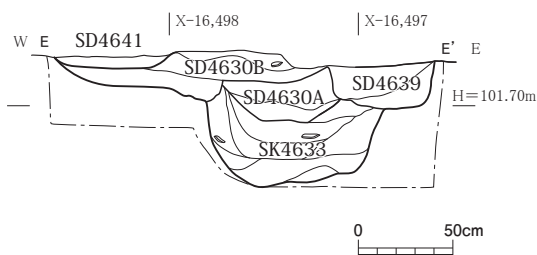


図 48 土坑 SK4633・南北溝 SD4639・4630A・B・4641 断面図 1 : 40

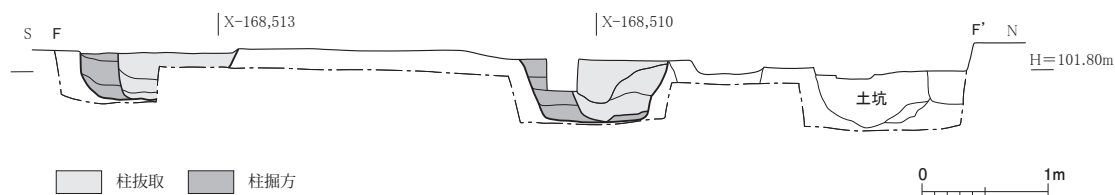


図 49 SB4637 柱穴断面図 1 : 60

～1.1 mの不整形円で、深さ 0.3 m。埋土は黒褐色で、弥生時代の甕蓋（図 51-2）が出土した。

土坑 SK4633 調査区南部で検出した土坑。南北溝 SD4640A に壊される（図 48）。不整形で南北に長く、長さ 2.3 m、幅 1.1 m、深さ 0.7 m。埋土は黒褐色で、石庖丁（図 53-7）や弥生土器片が出土した。

土坑 SK4634 調査区東南部で検出した土坑。東西 1.7 m、南北 1.1 m の隅丸方形で、深さ 0.35 m。埋土は黒褐色で、最下層から弥生時代の広口壺（図 51-3・4）が出土した。

（3）その他の時代の遺構

南北溝 SD4635B 南北溝 SD4635A に重複する南北溝。調査区外の南北へと続く。埋土は砂利層と褐灰色砂質土からなり、調査区北半では◎層上面で検出した（図 44）。幅 1.8 m 前後、深さ 0.5 m。調査区南端では砂利層の幅が大きく広がり、南壁の粗砂層に接続する（図 46）。このことから、砂利層は調査区の南側から流入した土砂に由来するものと考えられる。

南北溝 SD4630B 南北溝 SD4630A に重複する南北溝。調査区の北外へ延びる。調査区北半では◎層上面で検出し、幅 1.5～1.9 m、深さ 0.2 m。埋土はにぶい黄褐色砂質土および褐色砂質土で、調査区南半では多量の炭片を含む部分がみられた。

南北溝 SD4639 調査区南半で南北溝 SD4630A・B の東肩を壊す南北溝。幅 0.7 m 前後、深さ 0.3 m。南壁では粗砂層を壊しており（図 46）、暗褐色砂質土および黒褐色砂質土で埋まる。北に向かって浅くなり、X = -168.512 以北では SD4630B の埋土と区別が困難となる。

南北溝 SD4641 調査区南半、SD4630A の西側で検出した南北溝。幅 0.6 m、深さ 0.1 m で、長さ 6 m を検出した。埋土は灰黄褐色砂質土。性格は不明。

掘立柱建物 SB4637 調査区東南部で検出した建物。南北に並ぶ柱穴を 2 基確認した（図 49）。調査区の東外側へと展開する建物の一部と解釈した。柱穴掘方は南北にやや長い隅丸方形で、東西 1.0 m 前後、南北 1.1 m 前後、深さ 0.4～0.5 m。柱間寸法は 3.4 m。埋土からは良好な遺物が出土しておらず、時期は不詳。

南北溝 SD4642 SD4630 の東側で検出した南北溝。幅 0.7～1.0 m、深さ 0.2 m。南北 10 m 分を確認しており、調査区の北外へと続く。埋土は褐灰色で、サヌカイト製の石小刀（図 53-6）が出土したが、溝の時期は不詳である。

（谷澤亜里）

（4）出土遺物

瓦 類 出土瓦類の一覧を表 9 に掲げた。調査面積に

表 9 第 212 次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	点数	型式	点数	種類	点数
飛鳥寺 I	2	素文	1	熨斗瓦	1
飛鳥寺 X IV	1	重弧文	1	隅切丸瓦	1
不明	2			隅切平瓦	1
				ヘラ書き平瓦	3
計					6
				丸瓦	平瓦
				重量	16,670g
				点数	274
				平瓦	70,340g
				棟原石	1,850g
				点数	8

比して瓦の出土量は少なく、瓦の約半数は床土や包含層からの出土であり、比較的厚く堆積する調査区北半からの出土が目立つ。出土遺構としては、やはり南北溝SD4630A・SD4635Aからの出土が顕著である。

軒丸瓦はわずかに5点が出土したのみであり、そのうち型式が判明した3点を図50に掲げた。1・2は飛鳥寺I型式、3が飛鳥寺XIV型式であり、1・3が包含層(Ⅷ層)出土、2が耕作溝からの出土である。1は瓦当上面の破片であり、丸瓦の接合状況がよくわかる個体である。丸瓦の先端は凹面側をわずかにヘラケズリし、瓦当面近くまで深く差し込んでいる。接合後、瓦当裏面にヨコナデを施す。丸瓦部凸面はタテナデで整形する。2は瓦当下半部の破片であり、瓦当裏面を不定方向のナデで平滑

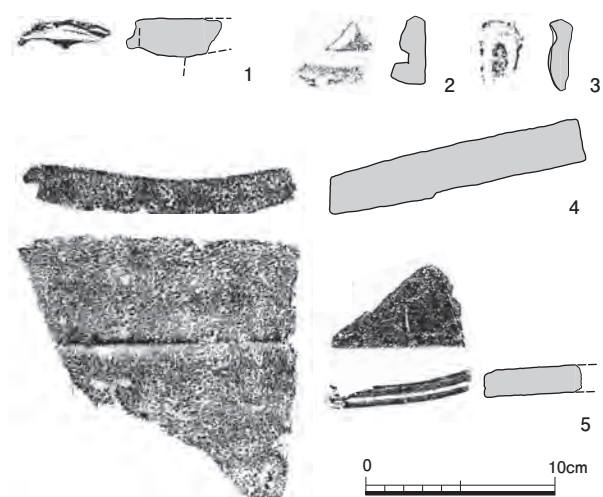


図50 第212次調査出土瓦 1 : 4

に仕上げ、瓦当側縁はヨコナデで調整する。3は複弁部のみの破片であり、瓦当裏面は残存しておらず、瓦当に粘土を詰めた際の単位面で剥離している。

4・5は平瓦だが、軒平瓦として使用された可能性が高いものである。4は厚さ2.0～2.5cmで、平瓦凹面の端部寄りをヨコナデで調整すると共に、凸面側をヨコナデ調整することによって、幅5.5cmの段額を設けている。全長は13.8cmと極めて短く、焼成前に切り詰めていると推定できる。南北溝SD4635A出土。5は厚さ1.4cmと薄手の平瓦だが、凹凸両面をナデで仕上げ、凹面にはわずかに布目痕が残存している。端面はヨコナデによって沈線状の表現がなされ、あたかも二重弧文のような様相を呈する。南北溝SD4635B出土。同程度の厚みを持つ薄手の平瓦は、このほかにも出土している。

このような軒瓦の状況から、調査区内で出土した瓦の大半は、調査区南方に展開する飛鳥寺から流入したものと推定される。このほか、鬘斗瓦や隅切瓦、ヘラ書きの一部が確認できる瓦などが出土している。(林 正憲)

土器 整理用木箱で26箱分の土器が出土した。その大半が古代の土器で、その他に縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、製塩土器、硯、緑釉陶器、瓦器、近世陶器などが出土している。以下、遺構から出土した土器を中心に報告する。

土坑 SK4631・4632・4634 出土土器 弥生時代前期～中期の土器が整理用木箱で1箱分出土した(図51)。1は土坑SK4631出土の甕蓋(PL.20-4)。ほぼ完形で、全体に煤

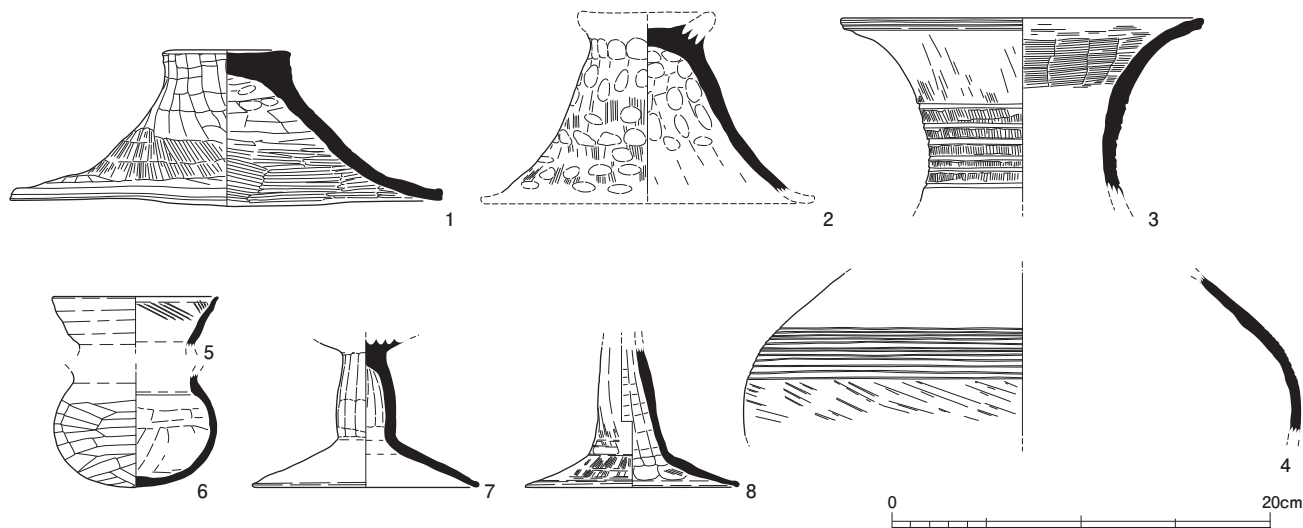


図51 第212次調査出土土器(1) 1 : 4 (1 : SK4631、2 : SK4632、3～4 : SK4634、5～8 : SI4636)

が付着する。つまみ部外面はヘラケズリをおこない、内面はナデで調整する。裾部外面には、縦方向のハケ目調整がみられ、内面には密にヘラミガキを施す。類例が弥生時代中期中頃にみられる。2は土坑SK4632出土の甕蓋。裾端部やつまみ部が欠損して脚部のような形状をなすが、全体に煤が付着することから、甕蓋と判断した。裾部外面に縦方向のハケ目調整、内面にはナデ調整がみられる。図化はしていないが、SK4632からは弥生時代前期後半に位置づけられる、突帯に刻み目をもつ壺胴部片が出土しており、本資料も同時期のものと考えておきたい。3・4は土坑SK4634出土の広口壺。胎土が異なることから、両者は別個体と考える。3は口縁部～頸部で、外面に縦方向のハケ目がみられ、頸部には6条のヘラ描き直線文を配す。口縁端部内外面をナデで調整し、内面には横方向のハケ目がみられる。4は胴部で、外面に12条のヘラ描き直線文をもつ。内外面とも器面が磨滅しているため、

調整は不明。類例が弥生時代中期中頭にみられる。

竪穴建物 SI4636 出土土器 整理用木箱で、1箱分に満たない古墳時代の土師器が出土した(図51、PL20-5)。5は小型丸底土器の口縁部。器面の磨滅のため、調整は不明瞭であるが、内面の一部にハケ目がみられる。6は小型丸底土器の胴部。外面をヘラケズリ、内面をナデで調整する。7・8は高杯脚部で、裾部との境が「く」字状に屈曲する。7は脚柱部中位が膨らみ、外面をヘラケズリで仕上げる。内面には絞り痕を残す。裾部は器面が磨滅しており、内外面とも調整は不明。8は脚柱部外面に弱い面取りがみられ、裾部内外面はハケ目で調整する。これらの土器は、小型丸底土器の形態や外面調整から布留4式期に位置づけられる。

南北溝 SD4635A 出土土器 溝埋土の黒褐色粘質土から整理用木箱1箱分の土器が出土した(図52)。古代の土器が多くを占め、土師器は杯C、杯G、杯H、高杯、甕B、

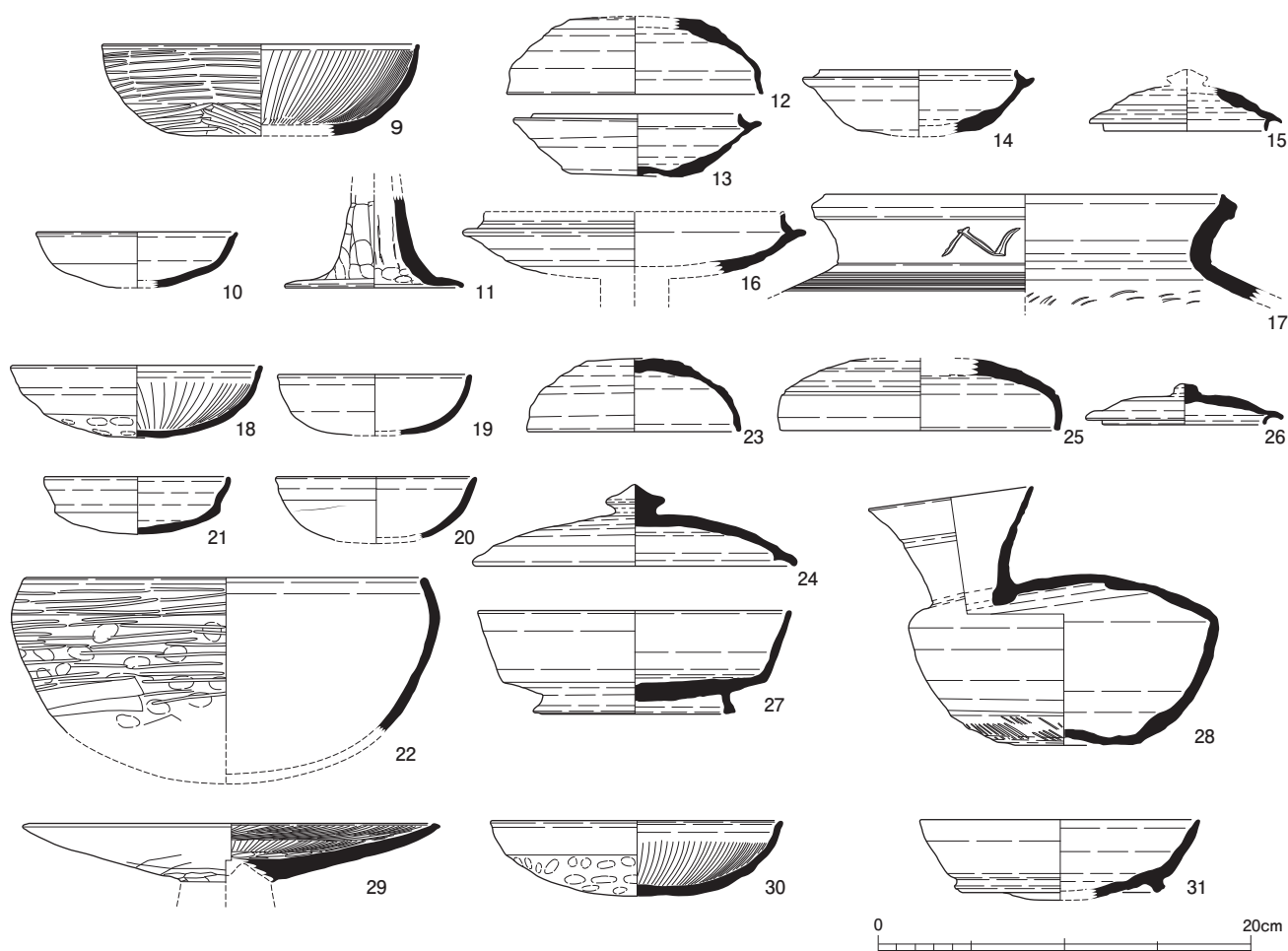


図52 第212次調査出土土器(2) 1:4 (9~17:SD4635A、18~28:SD4640A、29:SK4638、30~31:整地土)

須恵器は杯G蓋、杯H、杯H蓋、高杯、壺A、甕が出土した。

9～11は土師器。9は杯C。復元口径は17.0cm。内面に一段放射暗文をもち、底部内面に螺旋暗文がみられる。外面調整はb3手法。10は杯G。復元口径は10.8cm。口縁端部が内傾し、口縁部から底部にかけて黒斑がみられる。11は高杯脚部。脚柱部の外面は、部分的にヘラケズリをおこない、内面には絞り痕を残す。裾部内外面はナデで調整する。

12～17は須恵器。13・14は杯Hで、いずれも底部外面はヘラ切り不調整。13は、受部外端径13.3cmで、底部外面に「||」形のヘラ記号をもつ。14は、受部外端径12.4cm (PL.20-2)。12は杯H蓋。復元口径13.8cmで、頂部外面をロクロケズリで仕上げる。16は、受部外端径が18.4cmと大型になることから、高杯の杯部と判断した。底部外面をロクロケズリで仕上げる。15は、壺蓋。口縁部外端径は10.4cmで、外面に自然釉が降着する。17は甕。復元口径22.8cm。口縁部をナデにより仕上げ、肩部外面にはカキ目を施す。頸部外面に「N」形のヘラ記号をもつ。内面には、同心円文の当具痕がみられるが、部分的にナデ消されている。

須恵器杯H (13・14) は、口径などの形態的特徴から飛鳥Ⅰに位置づけられる¹¹⁾。一方、SD4635Aの上層に位置するSD4635B出土品の中には、SD4635Aに由来すると考えられる口径の小さい須恵器杯Gや杯G蓋があり、これらは飛鳥Ⅱに位置づけることができる。出土量が少なく、細かな時期比定は難しいが、SD4635Aの埋没時期については、飛鳥Ⅰ後半～飛鳥Ⅱと捉えておきたい。

南北溝 SD4630A 出土土器 溝埋土の黒褐色粘質土から整理用木箱3箱分の土器が出土した。土師器は、杯A、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿B、鉢、甕B、須恵器は杯A、杯B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、皿A、皿B、碗A、鉢F、壺、壺蓋、平瓶、甕が出土した (図52、PL.20-1)。18～22は土師器。18は杯C。復元口径13.5cm、器高は3.9cmで、径高指数は28.9。内面に一段放射暗文をもち、底部内面に螺旋暗文がみられる。外面の調整はa0手法。底部内面中央に焼成後に施された「+」形の線刻がある。外面にも、焼成後に施された細い条線が多数みられる。19・20は杯G。19は復元口径10.4cm、12は復元口径10.8cm。20の外面には粘土紐の接合痕跡が残り、胎土には1～2mmの砂粒を多く含む。21は杯

H。復元口径10.0cmで、口縁部と底部の境に明瞭な稜をもつ。22は鉢。復元口径は21.6cmで、口縁部は内彎する。胴部外面下位をヘラケズリで調整し、口縁部から胴部中位までにヘラミガキを施す。

23～28は須恵器。27は杯Bで、口径16.8cm。底部外面にロクロケズリを施し、「<」形のヘラ記号をもつ。高台は内寄りに付き、やや高い。内面に暗灰色の飛沫が付着する。24はかえりをもつ杯蓋。口縁部外端径17.4cmで、外面全体に自然釉が降着する。23は杯H蓋で、口径11.5cm。頂部外面はヘラ切り不調整で、内面に「一」形のヘラ記号をもつ。口縁部外面には重ね焼きの痕跡を残す。25・26は壺蓋。25は復元口径15.0cmで、頂部外面にロクロケズリを施し、口縁部外面には1条の凹線を配す。26は口縁外端径10.6cmに復元でき、小さなボタン状のつまみをもつ。28は平瓶。ほぼ完形で、口径8.8cm、胴部最大径16.6cm。口縁部に1条の凹線をもつ。外面調整は、胴部下半にロクロケズリを施し、底部外縁には平行タタキの痕を残す。

これらの土器は、土師器杯C (18) や須恵器杯蓋 (24) の特徴、高い高台をもつ須恵器杯B (27) の存在から、飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられる¹²⁾。

土坑 SK4638 出土土器 埋土から整理用木箱で1箱に満たない土器が出土した。出土土器の多くは小片で、器種がわかるものは高杯A (図52-29、PL.20-3) のみであった。杯部のみ残存し、二段放射暗文と螺旋暗文をもつ。復元口径は22.4cmで、外面は板ナデ調整をおこない、脚部との接合部には、部分的にヘラケズリがみられる。杯部外面の2ヵ所に焼成後に施された「キ」・「キ」形の線刻がある。飛鳥Ⅴ以降のものであろう。

◎層 (整地土) 出土土器 整理用木箱で3箱分の土器が出土した。多くを古代の土器が占め、土師器は皿A、鉢A、高杯、甕、須恵器は杯B、かえりをもつ杯蓋、かえりをもたない杯蓋、杯H、碗A、碗C、皿B蓋、皿C、壺、甕がある。

図52-30は土師器杯C。復元口径は15.6cm、器高は4.0cmで、径高指数は25.6。口縁端部に内傾面をもち、内面に一段放射暗文を施す。外面調整はa0手法。31は須恵器杯B。復元口径は15.0cm。底部外面はヘラ切り不調整で、底部が高台より下方に突き出る。

◎層から出土した古代の土器で、あきらかに奈良時代

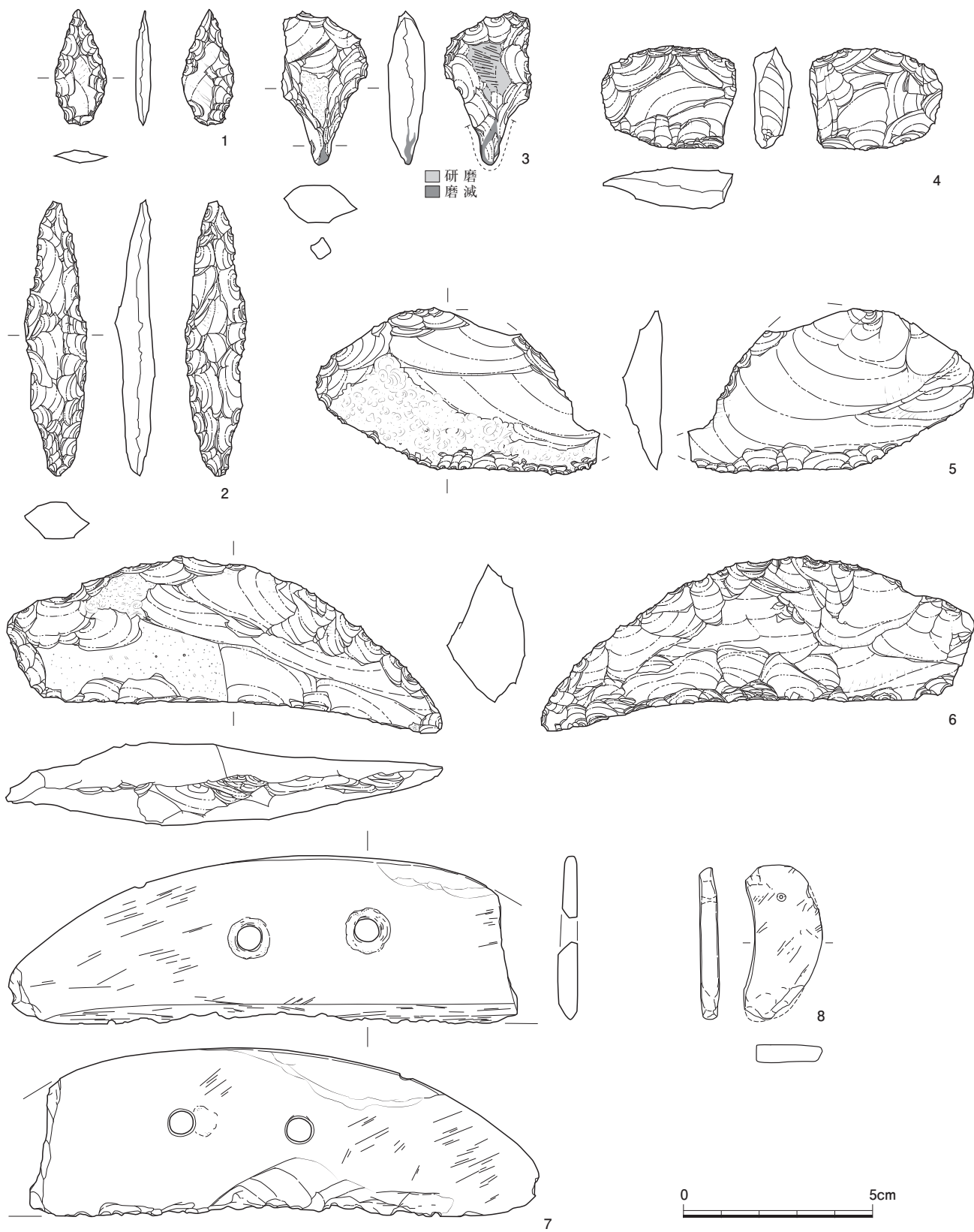


图 53 第 212 次調査出土石器 2 : 3

以降に降るものはみられない。かえりをもつ杯蓋とかえりをもたない杯蓋の両者が出土しているが、飛鳥Ⅴ以降に顕著になる大型の土師器皿や須恵器皿B蓋なども存在する。調査では整地が一時期のみであった確証は得られていないため、整地の時期は飛鳥Ⅳ～Ⅴと幅をもたせて考えるのが妥当であろう。(樋口典昭)

石器・石製品 包含層や遺構等から、小コンテナ5箱分の石器・石製品が出土した(図53、PL20-6)。このうち、サヌカイト製の打製石器は剥片・石核を含めて200点を超えており、総重量2169.68gにのぼる。

図53-1・2は石鏃。いずれも両面を押圧剥離で調整しており、1は両面に素材面を広く残す。2は柳葉形を呈し、最大長は7.2cmである。

3は石錐。短い錐部はその尖端が重度の使用によって著しく摩耗しているほか、片面のつまみ中央部には研磨時の線状痕が残る(アミ部)。弥生時代の土坑SK4633出土。

4は楔形石器。両面に対向方向の剥離痕があり、上下両縁がやや潰れている。側面には剪断面が残る。⑥層(遺物包含層)出土。なお、第212次調査で出土した剥片には、バルブが平坦で打面が点状・線状を呈するなど、両極打法で生じたものが一定量含まれる。

5は横形削器。横長剥片の末端部に2次加工を施し、刃部を作り出している。背面に残る自然面は、二上山北麓の関屋盆地に産するサヌカイト礫のそれに同じ。弥生時代の土坑SK4634出土。

6は石小刀。片面に自然面と素材剥片のネガティブ面が、もう一方の面にはポジティブ面が残る。概ね鎌形を呈するが、やや凹形をなす刃部の調整は比較的粗く、一部は潰れている。南北溝SD4642出土。

7は緑色片岩製の石庖丁。直線刃半月形で片刃である。紐孔は両面穿孔だが、刃部のある面からの穿孔は敲打後におこなっている。刃部には横方向の擦痕と刃こぼれ状の使用痕がみられる。弥生時代の土坑SK4633出土。

8は滑石製勾玉。扁平な板状で腹部の挟りは浅い。幅2cm、残存長4cm、厚さ0.5cm。南北溝SD4635B出土。

これらの石器・石製品は、サヌカイト製の有茎鏃や石小刀のほか、石包丁も出土していることから、大部分は弥生時代のものと考えられる。ただし、滑石製勾玉はその扁平な形状から、古墳時代中期後半以降に降る。

(森川 実・谷澤)

その他 金属製品としては鉄釘、鉄鍔とみられる鋳造の板状鉄製品片、不明鉄製品等が標本箱1箱分出土したが、全体形のわかるものは少ない。そのほか、少量の鉄滓と壁土片・羽口片等が小コンテナ1箱分出土したほか、弥生時代の土坑から木炭片が出土している。(谷澤)

5 成果と課題

飛鳥藤原第209・212次調査の成果を合わせて述べ、まとめとしたい。

古 代 第209次調査では、調査区南半を東西に延びる東西堀SA311および東西溝SD4610を50mにわたり確認した。東西堀SA311は、石神第1・3次調査区で検出していたものの東延長にあたり、第209次調査区までの総延長は85mを測る。これにより、石神遺跡南辺では飛鳥寺域との間に、東西方向の長大な堀が存在していたことがあきらかとなった。第3次調査ではこの東西堀SA311の南側に東西溝SD347を検出している。この東西溝は第3次調査区中央で北折して石神遺跡C期の南北基幹排水路SD640となるが、上流にあたる第1次調査区の中央および東半では経路が不明であった。第209次調査区で東西堀SA311の南を並走する東西溝SD4610の下層部分は、このSD347の東延長部分に相当すると考えられる。今回の調査で、SD347が第1次調査区よりもさらに東へ延びることが判明し、東西堀SA311とともに石神遺跡の南辺を画していたことがあきらかとなった。

いっぽう、第212次調査区では、東西堀SA311の延長線上にSA311は検出されなかった。したがって、SA311は第212次調査区までは延びないと考えられる。ただし、第212次調査区の南壁で確認した粗砂層は、検出面やその位置から第209次調査で確認された東西溝SD4610上層の埋土の一部である可能性がある。そのため、SD4610の下層にあたる東西溝SD347が第212次調査区の南外を通っている可能性も考えられる。第209次調査区よりも東側でのSD347の経路や、その北岸での東西堀SA311の展開が今後の課題といえよう。

第212次調査では、調査区中央を北流する2条の南北溝SD4630AおよびSD4635Aと、SD4635Aに壊される石組遺構SX4640を検出した。2条の南北溝は、位置関係や主軸の振れ、埋土の堆積状況などの違いから、併存するものとは考えがたい。SD4635A出土土器は飛鳥Ⅰ～

Ⅱ、SD4640A 出土土器は飛鳥Ⅲ～Ⅳに位置づけられ、それぞれの埋没時期の一端を示すものと考えられる。これらの溝の性格や、調査区の南外を西流している可能性のある東西溝 SD347 との関係を解明するためには、周辺におけるさらなる調査の蓄積が俟たれる。

出土土器を勘案すると、SD4635A は石神遺跡 A 期の遺構と考えられ、これに壊される SX4640 も主軸の振れを同じくすることから、両遺構に大きな時期差は想定しがたく、SX4630 も A 期に位置づけられる可能性が大きい。第 2 次調査では東西石組溝 SD435 のように東へと延びる A 期の遺構も確認していることと合わせると（『藤原概報告 13』）、第 1・2 次調査区よりも東側に A 期の遺構が展開する可能性が示唆される成果となった。

冒頭で述べたように、これまで石神遺跡 A 期は、第 209 次調査区よりも西方に位置する掘立柱建物群と南北塀を東限と想定してきた。今回の第 209・212 次調査により、第 1 次調査区よりも東方にあたる飛鳥寺寺域の北側に複数時期にわたる遺構が確認されたことは、遺跡の広がりを考える上で重要な知見である。

また第 209 次調査では、輔羽口や鉄滓、そして微小ではあるが鍛造剥片といった冶金関連遺物が出土した。これらは継続的な鍛冶行為とともに、近隣における鍛冶工房の存在を想起させる。本調査区が飛鳥寺寺域北辺に位置することも、示唆的である。

古墳時代以前 第 209・212 次調査ともに、弥生・古墳時代の遺構を確認した。なかでも、第 209 次調査で検出した造営方位を同じくする 4 棟の竪穴建物は、第 1 次調査区の竪穴建物 SB315 とともに、当該地が古墳時代中期前後に一定の集落域を形成していたことを示唆する。造営方位の揃う竪穴建物は、第 212 次調査区の西南隅でも検出しており、第 209 次調査区と第 212 次調査区の間にも集落域が広がる可能性がある。また、包含層からの出土ではあるが、第 209 次調査区出土の須恵器樽型甗や滑石製白玉は、これらの竪穴建物との関連が考えられる。

弥生時代の遺構としては、第 209・212 次調査ともに土坑を検出している。特に第 212 次調査では、弥生時代前期後半～中期に位置づけられる土坑を調査区東南部で複数確認した。同様な時期の土坑は第 1 次調査区の東南部でも検出されているほか、第 209 次調査区の包含層からも同時期の弥生土器が出土している。第 212 次調査区全

体から多量に出土したサヌカイトの剥片も、この時期の遺跡の展開を示すものと理解できる。

さらに、第 209 次調査では弥生時代後期に位置づけられる土坑も検出しており、長期的な土地利用の一端がうかがえる。くわえて、同調査では縄文時代草創期に位置づけられる木葉形尖頭器が出土しており、調査地周辺でのさらに古い時期の人間活動をも想定できる。このような調査地周辺における継続的な土地利用は、この一帯が西方で発見されている石神遺跡の遺構群からも一段高く、飛鳥川と中の川に挟まれた台地上に位置するという立地的特質とも関連するものであろう。（松永・谷澤）

註

- 1) 森川 実・大澤正吾「石神遺跡 B 期整地土・SD640 出土の土器群－石神遺跡第 3～5 次・第 10～12 次」『紀要 2018』。土橋明梨沙「石神遺跡出土の東北系黒色土器－石神遺跡第 3～8・11 次」『紀要 2020』。山藤正敏「石神遺跡 SD1347・SD1476 出土の土器群－石神遺跡第 8・9 次」『紀要 2021』など。
- 2) 相原嘉之「飛鳥古京の攻防」『琵琶湖と地域文化－林博通先生退任記念論集』サンライズ出版、2011。相原嘉之「3 飛鳥浄御原宮の宮城」『古代飛鳥の都市構造』吉川弘文館、2017 など。
- 3) 尾野善裕・森川 実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要 2016』。
- 4) 釈読は史料研究室による。ただし「大」とみた場合、横画が後に書かれており筆順が不審である。あるいは記号の可能性もある。
- 5) 森 隆「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、真陽社、1995。
- 6) 森川 実「飛鳥時代における須恵器食器の法量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会、2019。
- 7) 前掲註 5。
- 8) 前掲註 4。
- 9) 真鍋成史「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第 7 巻、小学館、2003。
- 10) 前掲註 8。
- 11) 前掲註 5。
- 12) 大澤正吾「飛鳥時代における土師器杯 C・杯 A の変遷とその区分」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会 2019。前掲註 1。